

南湖地区・松浪地区 防災都市づくりシンポジウム 開催報告

平成23年8月7日[日]

しおさい南湖で防災都市づくりシンポジウムを開催

茅ヶ崎市では、平成21年に松浪地区で、平成22年に南湖地区で防災都市づくりワークショップを実施しました。また、松浪地区では、防災都市づくりワークショップでの話し合いをきっかけに、様々な地域の取り組みも進んでいます。これらの取り組みを地域の方々と共有し、さらに地域の取り組みを進めていくために、南湖地区・松浪地区合同の防災都市づくりシンポジウムが開催されました。

第1部では、南湖地区ワークショップの結果報告のほか、浜竹一・二丁目での取り組みについて紹介していただきました。

第2部では、両地区の中学生やワークショップの参加者がパネリストとなり、座談会やパネルディスカッションが実施されました。

<シンポジウム内容>

日時：8月7日[日]8:45-12:00
場所：しおさい南湖
参加人数：96名

★講演「東日本大震災をふりかえる」
講演者：加藤孝明先生（東京大学）

第1部

★南湖地区ワークショップの結果報告
★浜竹一丁目の取り組み
★浜竹二丁目の取り組み
★講演「地域で防災対策・防災まちづくりを進めるためのポイント」
講演者：加藤孝明先生（東京大学）

第2部

★西浜・松浪中学校座談会
★パネルディスカッション
「地域から進める防災まちづくり」



発行：茅ヶ崎市 都市部 都市政策課
TEL 0467-82-1111（内線：2504）

発行日：平成23年8月
FAX 0467-57-8377

南湖地区防災都市づくりワークショップの開催報告

●ワークショップを開催して

- ・災害時には、やはり中学生などの若い力が必要
- ・幅広い世代で、防災体制を構築することが必要

●シンポジウムを通して

- ・今回のようなワークショップを、他地域の皆様にもご紹介することで、地域が主体となる防災都市づくりの活動を、広げていきたい

●今後において

- ・このワークショップで終わりということではなく、ぜひこれからも防災訓練や地域の防災活動を、小中学校と一緒にやっていきたい。



西浜学区青少年育成推進協議会 秋本副会長

浜竹一丁目の取り組み



浜竹一丁目 植松自治会長

●拡大役員会兼防災研修会を開催

- ・住民の防災意識を高め、自主防災組織を強化し、その機能を十分に発揮するための地域の体制づくりをする。

●家の玄関前先に、新たに消火器を設置

- ・玄関先という誰にでも目に触れる場所に消火器のような防災資機材を設置することで、防災意識の低い人たちにも自然と日常から地域の防災対策が分かるようにあえて設置。

●今後において

- ・防災活動には、女性ならではの視点も必要。
→女性防災リーダーを増やす
- ・気楽に災害時要援護者登録をしていただけるように、様々な交流等を通して登録しやすい環境をつくる。

浜竹二丁目の取り組み

●災害時要援護者も参加した訓練

- ・隣近所の住民が、近くに住む災害時要援護者を知る機会として、交流も含めた訓練を実施した。

●緊急避難路の指定

- ・地震で道路が塞がったことも想定し、個人宅の庭を二丁目の緊急避難路とした。

●避難終了カード

- ・災害時要援護者の避難が終了したということを、住民に知らせるため、カードを玄関先に張る。

●「いっときひなん所」の案内板の設置

- ・二丁目にある駐車場を指定し、誰にでも分かるように案内板を設置



浜竹二丁目 前田自治会長

1 復興まちづくりの現状 地域からボトムアップで 復興を進めることが大切

- 東日本大震災は3つのキーワードで説明できる
 - ①日本経済の低成長期に発生
 - ②非常に広い範囲で災害が発生
 - ③超巨大・甚大な災害
- 3つのキーワードに対応していくための政策的な道具がない
- 地域の課題に根ざして、地域からボトムアップで復興を進めていくことが重要

3 東日本大震災から何を学ぶか？ 様々な災害状況を想定し、 地域力を高めて対応する

- 想定以上の災害は発生する
- 事前に防災上手薄だと思っていたところはやっぱり弱い
- 避難所運営でも避難でも、最後は地域の力が必要
- 地域・季節・時間・災害規模など、条件が変われば違う状況になる

2 復興に必要なこと 地域の特性をふまえて バランスのよい取り組みを

- どこにでも通用する処方箋は無い
⇒地域の特性に応じた処方箋が必要
- 災害は、過疎化、高齢化といった、社会のトレンドを加速させる
- 被災すると、地域に以前からあった問題が同時に噴出する
- 4つの目のバランスがとれていると、よい復興になる
 - ①時間的に近くを見る目 ⇔ ②時間的に遠くを見る目
 - ③個人を見る目 ⇔ ④俯瞰的に見る目

4 次の災害にどう立ち向かうか 継続的な「自助」、「共助」、 「公助」の実現が重要

- 基本は「自助」、「共助」、「公助」
 - ①個人、地域、行政それぞれが、この地域で起こりうる被災状況について共通に理解している。
 - ②個人、地域、行政が相互に、「だれが」「何を」「どこまで」やってくれるのかということを互いに理解している。
- ⇒継続的な「自助」、「共助」、「公助」を実現



西浜・松浪中学校 座談会1/2

Q1.ワークショップに参加して思ったこと

(市川さん) 中学校の授業で行った地域マップづくりのときに、自分の住むまちのことは調べて理解できましたが、そのときはまちの問題やその解決策を考えることはできませんでした。今回のワークショップを通じて、ブロック塀の危険性や火災が起きたときに広がっていく範囲など、深くまちの危険について知ることができたなと思いました。

(菊地さん) 思った以上に道が狭いところが多く、改めて自分のまちの危険性に気づけました。

(柏木さん) 近所づきあいが大切とか、もっとたくさんの方が参加して、関心を持って防災対策を考えなきゃいけないということもわかって、よかったです。

(福田さん) 南湖はお年寄りが多いので、中学生が助ける側として意識を高めなければいけないと思います。

(加藤先生) どんな危険なまちに住んでいても、やっぱり安全なまちに住んでいるって錯覚を起こすのが、人間の本质みたいなんですね。あと、安全でないということを知ると大変不幸せな気分になるので、できれば聞かなかったことにしたいっていうのも、人間の本质なんですよ。

福田君の言った、中学生として地域に対して何かしなければいけないという自覚が芽生えたということなんですけど、昼間の地域を考えると、多分お父さんはいないですよ。中学生は大人としての役割を担うことができそうですか？

(福田さん) 実際に災害が起こってしまうと、僕たちは多分とても慌ててしまって、自分の命を守ることが精いっぱいだと思うので、日ごろから練習をした方がいいと思います。



Q2.地域でやりたい取り組み

(市川さん) 被災時に邪魔になるのもブロック塀だし、命の危険にかかわるのもブロック塀なのに、何でそこまでブロック塀にこだわって建てようとするのかが私たちの立場から不思議でした。ブロック塀を減らしていく頭に切りかえてほしいと思いました。

(加藤先生) ブロック塀を単になくすというのは、言っているだけでは前に進まなくて、なぜブロック塀にしているかということをちゃんと解明して、理解すれば、なくす方法も出てくるというような見方でした。大人からしてみると、ブロック塀はもともとあるものだし、仕方がないっていう目で見ついつい見えてしまうけれども、冷静に考えるとブロック塀である必然性ってあまりないような気がするんですね。

(福田さん) 井戸活用プロジェクトをやった方がいいと思います。もし火事になっても井戸があったらすぐ消せると思います。

(菊地さん) 消火器の位置を確認し、場所を覚えらると思うので、消火器を掃除する活動をしたいと思います。



Q3.こういう活動をほかの中学生にも広げていくために、どういう工夫をすればよいか

(市川さん) “いつとき避難場所”について、友達に「知っている？」って聞いたら、圧倒的に「知らない」って言った人が多かったの、これからもっと活動を広げていくべきだと思います。

(柏木さん) ブロック塀をなくす方法を、現実的じゃなくてもいいから楽しく考えれば、みんながもっと考えてくれると思います。

西浜・松浪中学校 座談会2/2

(加藤先生) 中学生だけじゃなくて大人も全く同じで、楽しくないとやっぱりやる気が起こらない。また、あまり気負わず、自由な雰囲気をどうつくるかということがとても重要。自由に発言して、みんなで一緒に考えていく、それがまちづくりのおもしろさなのかもしれないですね。



Q4.何が楽しかったか、どうすれば楽しくできるか

(柏木さん) ブロック塀のなくし方を、現実的じゃなくてもいいから何か考えてくださいって言われて、みんなで意見を出し合っただけながらやったのが楽しかったです。

(加藤先生) 自由に発想できるっていうのが楽しかった。ぜひ学校教育でも取り入れてください。

(福田さん) もっと中学生を増やして、学級委員とかを取り入れて増やしていけば、もっと楽しくなると思いました。

(加藤先生) 多分2本立てなんだろうね。繰り返し同じことをやることで、今回の三陸の子供たちの避難でも、体に身につけているので自然に体が動くようになった。だから繰り返しやらなきゃいけないという大切さと、繰り返さない、常に新しい何かを生み出していくという楽しさ、それをうまく組み合わせることが、全体として楽しい取り組みになっていくということなんだろうね。



Q5.今後どうしていけばよいか

(市川さん) 今の1、2年生にも継続してほしいんですけど、私たちが考えたことを最初何も聞かずにやってもらって、私たちの意見に縛られることなく、また新しい意見を出してほしいと思います。

(福田さん) 僕たちが高校生になったら多分南湖にほとんどいないと思うんで、後輩に任せて、またこういうワークショップをやっただけじゃ、僕たちとしてもうれしいし、後輩としても勉強になると思うので、今後にも役立ててほしいです。

(柏木さん) 私たちも高校生になっても参加していきたいんですけど、人がいっぱいいればその分ももっといい案も出ると思うので、これから中学に入る小学生とか、中学生とかにも参加してほしいです。

(加藤先生) 中学生から、素朴なもの、本質をついたもの、多分とんでもないものまでいろいろな意見が出てくると思うんですね。それをきちんと地域とか学校が受けとめて、何でもちっちゃなものでもいから実現されていくと、新しいものを生み出す楽しさというのが出てくるし、大人にとってもマンネリ化しなくなると思うんですね。だから、そういうのを積み重ねていくと、子どもと大人の世界がうまくつながって、お互いにとって刺激し合えるような関係で、いい地域ができるのかなということを感じました。

(市川さん) 中学生とかまだ参加者も少ない中、こういう活動をしているんだよと広めていきたいです。

(加藤先生) 今日いる中学3年生は来年度、高校生になってしまいます。高校生になると途端に地域に関心が行かなくなると思うんですね。せつかくここまで蓄積ができていっているので、高校生になっても何らかの形で地域に関心を持ち続けられるような仕掛けを、むしろ地域側で準備していくことが大切かなと感じました。

パネルディスカッション1/3

Q1.過去1、2年を振り返って

(西之宮さん) 地域の皆さんとの人間関係を再構築できました。私自身、生まれも育ちも南湖ですが、わかっているつもりでも、やっぱり知らないところもあったんだなというふうに感じました。

また、道が狭く車が入ってこないの安心して通学ができるという中学生の意見もありましたので、そういう点がよかったかなと思います。

(植松さん) 近所づき合いの大切さというのがワークショップのときには話が出なかったのですが、今回はそういう意味で、近所のつき合いが普段からうまくやっていないと問題が残るのではないかとということが口々に話されたことが印象的です。

(福田さん) 道が狭いと車が来ないんで、普通にマラソンとかもできてよかったと思います。

(加藤先生) 要するに物の見方を少し変えると全然違う姿が見えてくる。道が狭いので、普段から車通りもそんなに多くないんですね。実は歩行者空間だけを取り上げてくると、他のまちより歩行者空間は広いかもしれない。そういう見方をすると、それを生かしたまちづくりというのも僕はあり得るのかなという気がしました。

中学生の議論の中で暴走自転車が多いと言っていたので、そういう意味ではマイナスもあるんですけど、通常の20世紀的価値観に基づくまちの見方だけではなくて、この地域ならではの見方をしていくということが大切なんだろうなということを感じました。



Q2.東日本大震災を契機として、地域の中で何が変わったか

(植松さん) 皆さんが防災に関心を持ち出したことです。3.11でどんなことを学んだのか、この経験からどんなことを反省すべきかということについて、皆さんが自分のこととして話ができるようになってきています。自治会としてもそれをうまく吸い上げながら今後の活動を進めていきたいと思っております。

(西之宮さん) 非常に津波への関心が強くなりました。直下型地震を想定して、ワークショップを開催してきましたが、それプラス津波という形を考えていきたいと思っております。



(市川さん) 私が地震の後に起きたら嫌だなって思っていることがあって、それは情報に流され過ぎてしまうことです。今回大きい津波が来て、津波だ、津波だって思っているうちに、ほかの災害とか火災とかのことを忘れてたりして、津波には万全に備えていたけれど火災には備えていなかったという事態にはなってほしくないなと思いました。

(加藤先生) 今回、防災に関心を持つ人が増えたわけなんですけど、これがにわかに関心が増えて、すぐ関心がさめるということにもなるかもしれないですね。でも逆に言うと、にわかでもいいから今これだけ関心を持っているとすれば、それを生かさない手はないですよ。

あと、防災に関心があるといっても、実は大半が津波に関心があるかもしれない。どこかに関心が行ってしまうと相対的にほかのことは忘れてしまうということで、市川さんの指摘は全くそのとおりだと思います。

パネルディスカッション2/3

Q3. 各地域で考えているこれからの取り組み

(西之宮さん) 無関心層が多いんですね。そういう人たちにどのように防災意識を高めていくかということが重要です。無関心層は多いんですが、特に若い人など神輿に対しては非常に関心が多い人が多いんですね。いかにこれからそういう人たちを育てていくか、あるいは参加してもらうかということが大きな課題だと思います。

(市川さん) 防災訓練というと、いつも何時間目に教室にいて、何時になったら放送が鳴って、グラウンドに出てという指示を受けてやるんですけど、そうじゃなくて、突然の防災訓練を始めて、先生の指示も受けずに中学生だけで行動してみたら、中学生が自分の考えで動けると思います。

(加藤先生) 中学生も大人もですけど、主体性をどう引き出していくかというのは、多分共通のポイントなのかもしれないですね。祭だと、祭をやらされているというふうには多分思わなくて、防災訓練だとやらされているという気分になっている。進め方の工夫というのが、多分重要になってくるのかなという気がいたします。



Q4. 火災延焼への対策を地域でどう考えているか

(西之宮さん) 消防団の車で、「こちらは第4分団です。軒下や家の周りに燃えやすいものを置かないようにいたしましょう。防災について隣近所お互いに話し合しましょう」とアナウンスしています。

今年も9月10日が南湖地区の防災訓練日なんですが、総合防災訓練の中で、中学生の意見にも出たバケツリレーをやりたいと思っています。

また、防災リーダー会を設けて、避難誘導や消火など、防災リーダーとして何をするのかということ、机上だけではなくもっと掘り下げてやっていかないといけないと思っています。

(植松さん) 役員の自宅の玄関に消火器を置いています。消火器があっても、すぐには火は消せないという話も聞いておりますが、防火意識それから防災意識を高揚する意味でも、目につくところに置く意義があると思っています。そういう意味で、今後も役員の人には消火器を持ってもらって、そういうときに備えるということが続けていきたいなと思っています。

(加藤先生) 非常に長い時間をかければ燃えにくいまちも実現していく可能性があるということですので、対応力を高めることと万が一火災で燃え広がったとしてもちゃんと逃げられるようにすることが当面の課題となります。要するに燃えるけど消せるまち、燃えるけどちゃんと逃げられるまちということを当面目指していくと、そこが短期的な防災が目指すべき安全水準であるということなんだと思います。

火が出なければ火事になりませんので、火を早い段階で、それこそ天井に燃え移る前ぐらいでちゃんと消せるという状況をまずはつくるというのが重要で、そのための消火器であり、バケツリレーであるということなのかなと思いました。

バケツリレーですが、バケツリレーだけやっていると「共助」の自己満足に陥ってしまう可能性があるんで、そこは何かプラスアルファの何かが必要なんだらうなと僕自身感じています。

パネルディスカッション3/3

Q5. 正しい情報の伝達方法

(植松さん) 情報が入手できないという状態になってほしくないということで、今回の防災資機材の購入の中にラジオ、それから連絡用の無線といったものを買おうということを計画しています。そういった意味で、これは1人が頑張ってもなかなか情報は集められないので、防災リーダー会議などを活用しながら、グループで対応したいなと思って、そのための準備をしているところでございます。

(加藤先生) 正しい情報を入手するというのと、それを地域の中できちんと伝達するという2つあるんでしょうね。正しい情報を入手するといったときに、なるべくたくさん媒体を準備しておく、想定外の事態に対して強くなっていくことにつながると思うんですね。三陸だと防災無線が津波で壊れて、何の役にも立たなくなってしまったなんていう事例もあります。よく我々の言葉でフェイルセーフというんですけれども、失敗しても大丈夫なようにしておく。要するにある対策がうまくいかなくてもちゃんと次が準備されているという、その厚みをどう増やしていくのかというのが1つのポイントになっていて、防災無線もあればテレビ・ラジオもあるし、茅ヶ崎だとコミュニティFMもありますよね。そういったものをうまくどう運用していけるかっていうことと、伝達に関しては、やっぱり人間関係というのが大きな力になるのかなという気がいたします。

Q6. 今後の意気込み

(西之宮さん) やっぱりずっと持続する、何年もかかってもやっていかなきゃいけないんだと思います。一朝一夕には防災に対しての対策はできません。ここにいる中学生が大人になって家を建てるころには、もう立派な道路ができる、できているのではないかなと期待しております。

(植松さん) まず家族の中で安否確認の方法について話し合っていて、避難先での安否確認に活用できそうであれば、活用していきたい。

(福田さん) 少しでも地域に貢献したいので、僕たちにいろいろやらせてほしいです。

(市川さん) 課題ばかりが出てきて、マイナスのイメージを持ってしまいがちですが、「津波が来たらどうしよう」といった大きな問題を考える前に、近所の人とのコミュニケーションなど小さいことから大切にしていきたいと思いました。



(加藤先生) ここに来ている人たちは非常に意識が高く、もうやる気満々に見受けられるんですが、ここに来ていない人たちの方がむしろ問題で、地域の中でどう浸透させていくかというのが重要なのではないかなというふうに感じます。

また、持続性を高めるということも重要ですが、これについては今回中学生が参加して、さらにそれを後輩になんていうふうにも言っていましたので、何とかうまく継続していけるんじゃないかなと安心感を持つことができました。

それから全市への展開というときに、1つの市民運動みたいな形でこういう活動が全市に広がっていくと、新しい何かが、茅ヶ崎モデルみたいな形のものがつくれるんじゃないかなと強く感じました。例えば、今日壇上にいらっしゃる経験者が、自分たちの経験を市全体で共有しようというような形で、地域の人が周辺の地域の人たちをさらに啓発して、巻き込んで、さらに大きな運動にしていくというようなスタイルができるんじゃないかなと今日お話を聞いていて感じました。多分、この先、いろいろな展開の方法があると思いますので、中学生も含めて皆さんで、私も含めて考えていけるといいなと思いました。